

## 話し合いの場面で発言しない理由

### —自己意識と他者意識との検討—

発表者：小林祐太

指導教員：中間玲子

#### 【問題と目的】

現在、アクティブラーニングの隆盛とともに学校種など問わず話し合い場面は増加している。一概に話し合いといっても様々な目的や場面設定のもと行われているが、どの話し合い活動場面においても、学習者(生徒)が積極的に発言をしあうことによって単に知識の習得のみでなく、知識の生成や探究する姿勢の獲得が期待されている。しかし、話し合い場面において発言しない、できないという人たちも一定数いることは事実である。そして話し合いの内容や状況によって発言のしやすさにも大きく差があるとも考えられる。

また、川畑(2007)や藤井・山口(2003)はそれぞれ挙手行動、質問行動について自己意識、他者意識が抵抗の要因になっていることを指摘している。

本研究では、話し合いの場面で発言をしない要因がどのような部分にあるのかを明らかにすることを目的とすると共に、次の4つの仮説について考察することとした。

1.公的自己意識特性の強い人は自分が発言したことによって他者からどのように思われるのかを気にして、自己に対するマイナスイメージを持たれるのを避けるために発言をしないことを選ぶのではないか。2.私的自己意識特性の強い人は話し合いの内容について自分の意見を自覚して自分の意見を発言することに関して抵抗なく発言できるのではないか。3.内的他者意識特性が強い人は他者の内面について目の前の他者について根拠を持って判断するため他者が抵抗の要因にはならず発言できるのではないか。4.空想的な他者意識特性の強い人は発言をしたことで受け入れてくれないような自分に対して否定的な他者像を創り出しその結果発言をすることが怖くなり発言をしないことを選ぶのではないか。

#### 【論文の構成】

第一章 問題と目的 第一節 話し合い場面で発言するとは 第一項：話し合いを通じた学習場面、第二項：話し合い場面での発言の個人差／第二節 自己意識について／第三節 他者意識について／第四節 本研究の目的 第一項：目的、第二項：仮説

第二章 調査の方法 第一節 調査の概要／第二節 質問紙の構成

第三章 結果 第一節 話し合いの場面で発言をするかしないか／第二節 話し合い場面で発言をしない理由の因子分析結果 第一項：話し合い場面で発言をしない理由の項目について、第二項：自己意識特性について、第三項：他者意識特性について／第三節 獲得転換の関連 第一項：話し合いの場面で発言をしない理由の項目と発言意欲との検討、第二項：話し合いの場面で発言をしない理由の5因子間の関連、第三項：話し合いの場面で発言をしない理由の5因子と自己・他者意識の関連

第四章 考察 第一節 話し合い場面で発言をしない要因がどのような部分にあるのか／第二節 自己・他者意識との関連／第三節 本研究の結論／第四節 今後の課題

## 【方法】

2023年11月1日～12月21日ごろに、質問紙とWebによる調査を並立して行い、18歳～24歳の大学生113名（質問紙49名、Web64名）に対して調査を実施し、回収したもので不備のなかった113名（男性39名、女性73名、性別不明1名）を対象とし、有効回収率は100%であった。質問紙は0.フェイスシート 1.話し合いの場面で発言をしない理由、55項目、5件法 2.自己意識特性（菅原，（1984），21項目7件法）3.他者意識特性（辻，（1993）15項目5件法）という構成であった。

## 【結果と考察】

発言しようという気持ちは総計113人へのアンケートの結果、「ほとんどない」6人（5.3%）、「あまりない」36人（31.9%）「まあまあある」58人（51.3%）、「とてもある」13人（11.5%）であった。発言できない・発言しない程度は総計113人へのアンケートの結果、「ほとんどない」10人（8.8%）、「あまりない」33人（29.2%）、「まあまあある」59人（52.2%）、「とてもある」11人（9.7%）であった。

発言をしない要因については因子分析の結果、「評価不安因子」「能力不安因子」「集団苦手因子」「話し合い消極的因子」「環境要因因子」の5つの要因があることが分かった。このことから他の人からの評価を気にすること、能力不足の露呈を不安に思うこと、グループの人などに注目を浴びることを気にすること、話し合いそのものの意義を見いだせていないこと、グループ全体の能力不足を疑うことが発言しない・発言できないことの要因になっていることが示された。

自己・他者意識と発言をしない要因の相関を見たところ、公的自己意識、外的・空想的な他者意識に注意の焦点が当たると話し合いの場面で発言しない要因と結びついて発言しないことにつながることを示された。私的自己意識、内的他者意識に焦点が当たった場合については少なくとも発言を妨げる要因にはあまり関係ないことが示され、発言を促すためにこれらの意識に焦点づけられるようにすることが有効である可能性が示唆される結果となった。

本研究で明らかになったことをもとに今後話し合いを指示する際は以下のことを留意するとよいのではないかと考える。1.話し合いの意義を明確にすること。2.アサーティブな能力も同時に育てていくこと。3.個人の意見をきちんと持つ時間をとる。またその際にそれぞれの意見・考えについて教師側が価値づけ、評価を行うこと。4.話し合いの際に役割をもって参加すること。特に、5因子の得点をふまえると、他者からどのように評価されるのかという不安を取り除くために、まずは自分が他者の発言をどのように受け入れるかということから教室で学ぶことで、教室にいる他者も同じとらえ方をすることについて学ぶことから取り組むことが大切であるのではないと考えられた。

## 【主要参考文献】

辻平治郎(1993).自己意識と他者意識，(株)北大路書房